

# 森鷗外「舞姫」の「塵泥」における改稿問題

檀 原 みすず

## はじめに

「舞姫」の七種の本文中、『美奈和集』（明治25・7春陽堂）に次ぐ大幅な改稿として『塵泥』（大正4・12千章館）文に注目したい。既に他の六稿体については調査検討を済ませているので、本稿では『美奈和集』から二十三年もの歳月を経て、『塵泥』でどのような改訂が施されたか、鷗外の規範意識に重点を置き、調査を進めたいと思う。

『塵泥』での改削問題は、先学の阿達義雄氏が「森鷗外『舞姫』の改訂とその意義」（新潟大学教育学部紀要）昭和38・3）の中で取り上げているが、その結論を完全には容認し難く、改めて『塵泥』本文に対する客観的な検討が必要であらうと思われる。

岩波書店版『鷗外全集』（昭和11・6）が『塵泥』を底本に採用して以来、『塵泥』は、「舞姫」の決定稿として流布して来たようだが、その底本選定時の調査が必ずしも妥当でなく決定理由も曖昧だったため、今日なお疑問が残る。「舞姫」の文体研究にしても殆どが岩波版『鷗外全集』をテキストに使用しているので、『塵泥』による「舞姫」文体の特質しか得られない結果となっている。『塵泥』文が果して鷗外の「舞姫」を代表する文章と呼べるかどうか、『塵泥』文をもって鷗外文体を研究する危険性はないのか、などに就て従来、不明瞭なままにしていた問題をも追究してみたいと思う。

そこで、『塵泥』の原拠となった『改訂水沫集』文と『塵泥』文との異同状況を調べ、改訂内容を十分に吟味した上で、『塵泥』文の性格や意義について考察してみよう。

分節番号

## 小句の変更

①⑦ 他の梯は穴居の鍛冶が栖家に通じ↓他の梯は寄住まひの鍛冶が家に通じ

③⑧ エリスと余とはいつの間にか、有るか無きかの財産を合せて↓エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合せて

⑥⑥ 語學のみにて世の用をばなすべし↓語學のみにて世の用には足りなむ

『塵泥』では、文の内容にまで及ぶような大幅な改削はなく、文の一部分に於て僅かな語句の手直しを施したにすぎない。①⑦は表現の熟さない硬い文を平明で柔らかにする意図も見られる。このような変更から表現効果が上ったとも言い難く内容面でもさ程の違いはないようである。

## 用語の変更

①① a 字書↓辭書 ①① b 條例↓法律 ①③ 小説家↓詩人 ①④ 財産↓收入 ①⑤ 梯↓階 ①⑦ あらまし↓おほむね ①⑨ がらす窓↓玻璃窓 ①⑤ 務め↓任務 ①⑤ 物憂さ↓心憂さ ①⑦ 果斷↓決斷 ①④ 戸の下↓戸の外 ①⑤ 夜半↓半夜 ①⑤ ブリヨオトジン↓パラノイア ①① a は漢字を対象とする「字書」を言葉を対象とする「辭書」への変更であり、意味の包括する範囲が広い語に換えられている。

①① b は、当初「條例」が法規全般を含む言葉として用いられていたが、時代とともに法体系が整備され、条例が法律の一部にすぎなくなったため、法規一般を示す「法律」という言葉に換えたのではないかと思われる。①③は独語に置き替えた場合、Novellist「小説家」が短篇小説作家を示し、Dichter「詩人」は創作家全体を意味する。鵜外は独語を念頭に置き包括範囲の広い言葉に改めたのではないだろうか。③⑧は意味上より適切な語に、①⑤は陋巷やエリスの貧家に見る「梯」とカイゼルホッフの大理石の「階」との差違を別の漢字によつて書き分けたもの。因に「文づかひ」には「大理石の階へまあぶるのかい」とルビが振つてある。①⑨は古語への変更。草稿では「硝子窓」とあり、「玻璃窓」とは漢字表記を異にするので読み方も変ると見てよい。①④は和語から漢語への変更。①⑤は「心憂さ」の方がより内面的で、直接的な表現である。①④は場所をより具体的に、③⑧は「耐忍」「抗抵」などと同様に明治期に多い上下の漢字を置き換えた同意語と考えられるが、誤植の可能性もある。①⑤は精神医学の面で、疾病概念が変遷し、分類が細分化されたことに応じて病名を変更したと考えられる。Bisinn は鵜外の『語彙材料』（明治15・16年）で「痴呆」の訳語が当てられ、『獨逸醫學辭典』（明治19・20）でも「精神痴鈍・痴呆」となっていた。江口襄の『精神病学』（明治19・9）では「精神病分類表」中「第五類 懦弱ノ症」に「失神 Bisinn」の項目があり記述内容はエリスの病状と類似する。「ブリヨオトジン」という病名は或いはこれを参考にしたのかも知れない。一八九三年（明治26）エミール・クレペリン

により Paranoia が分裂病とは別個に定立された。鴉外は新しい医学知識を得たことでエリスの病名を変更したのではないかと思われる。なお Blödsinn は現在医学用語としては廢語となっている。

Paranoia は日本で從來「偏執症」と訳されたが現在では「妄想症」に統一されている。もともと現在で言うパラノイアの症候はエリスの病状とは一致していない。

用語の変更には外に次のような例が挙げられる。

- ① 熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし↓熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり
- ② 一つとして新からぬはなく↓一つとして新ならぬはなく
- ⑩ やうやく表にあらはれて↓やうやく表にあらはれて
- ⑬ 頑固なる心↓かたくななる心
- ⑮ みかへりたる面↓かへりみたる面
- ⑲ 少しく訛りたる言葉↓少しく訛りたる言葉
- ⑳ 同時に發したるもの↓同時にいだしゝもの
- ㉑ この行ありしを訝かしみ↓この行ありしをあやしみ
- ㉒ 費をば掩ひつべし↓費をば支へつべし
- ㉓ 余を載せ去りて↓余を拉し去りて
- ㉔ 髪は蓬ろに亂れて↓髪は蓬ろと亂れて
- ㉕ ①②⑩はより古い語への変更である。①「徒なり」は中古和文(特に源氏物語)に用例が多い。②は「新へあたらし」から中古語としての「新へあらた」へに変更。㉕「少しく」は古く「すこしき」という副詞が形容詞連体形と誤認され生じた語であるのでこれを正し

い用法に改めたとみられる。㉕は形容動詞「蓬ろなり」を古来の名詞的用法「蓬ろ」に換えたもの。㉕㉖は意味を厳密にするため、より適切な語に変更。㉗㉘㉙は漢語から和語への変更である。㉚「頑固なる」はへかたくななると読むことも可能である。

用語の変更で加筆および省略の例を次に挙げる。

- ② 記したる紀行は日ごとと↓記しつる紀行文日ごとと
- ⑩ 時來れば包みても包みがたきは↓時來れば包みがたきは
- ⑬ a 是れ余を知らねばなり↓こは余を知らねばなり
- ⑬ b 怎でか他人に知らるべき↓怎でか人に知らるべき
- ⑮ 厚紙にて張りし下の↓紙にて張りたる下の
- ⑳ 若し即時に郷に歸らば↓御身若し即時に郷に歸らば
- ㉑ 委しく此にし寫し出さん↓委しくこゝに寫さん
- ㉒ エリスは。「故郷よりの↓エリス云ふ。「故郷よりの
- ㉓ 心中に一種の寒さを↓心の中に一種の寒さを
- ㉔ 魯西亞より歸り來んまで↓魯西亞より來んまで
- ㉕ 怎なる業をしても↓怎なる業をなしても
- ㉖ 「あつ」と叫びぬ↓「あ」と叫びぬ
- ㉗ 加筆は㉘㉙㉚の三例あり、省略は⑩⑬ b ㉓㉔㉕の六例ある。
- このうち⑩㉓は誤植と見てよい。⑬ b ㉓は語意が簡素化し、かえって具体性に欠ける。⑬ b 「他人」は八ひとと読む可能性もある。
- ㉕は促音「つ」の省略で古語表記となっているが、誤植とも考えられる。②⑬ a ㉔は加筆および省略の併用例である。㉔は主語エリスに対する述語を補い文の不備を整えている。このように字数を変

えて文の調子に変化を与えている。

### 助動詞の変更

文末における助動詞の変更は、『塵泥』では比較的少なく次の十例が挙げられる。

- ① 萬事は破竹の如くなるべしなど、廣言しぬ。(↓つ)  
 ⑬ 我心の能く耐へんことをも深く信じたり。(↓たりき)  
 ⑲ 時計をはづして机の上に置き。「これにて(↓置きぬ)  
 ⑳ 離れ難き中となりしは此折なりけり。(↓き)  
 ㉑ 余は微笑したり。(↓つ)  
 ㉒ 余は少し踟躕したり。(↓つ)  
 ㉓ 簾を除いたりと言ひおこせつ(↓除きぬ)  
 ㉔ 一瞥して余は驚きたり(↓ぬ)  
 ㉕ 外套の肩には一寸許も積りたり。(↓たりき)  
 ㉖ 此恩人は彼を精神的に殺したり。(↓殺しゝなり)  
 ㉗ 過去・完了の助動詞の間で変更が行われ、主に完了助動詞「たり」の処理に於て、他の完了助動詞「つ」や「ぬ」に改められ、或は過去助動詞「き」と重ね用いられる傾向にある。『美奈和集』改訂の際に顕著であった(ぬ↓つ)の変更は『塵泥』ではただ一箇所だけである。
- 文中における助動詞の変更は三三箇所にものぼり、過去・完了の助動詞に対して書き換えが集中している。<sup>(注3)</sup>
- ① 舟に残りしは(↓残れる)

- ④ 歌によみし後は(↓よめる)  
 ㉔ 白布を掩ひし臥床あり(↓掩へる)  
 ㉕ 凍りし窓を明け(↓凍れる)  
 ㉖ 「ブリュツシュ」を被ひし「ゾファ」(↓被へる)  
 ㉗ 漸くにしるくなりし(↓なれる)  
 ㉘ 厚紙にて張りし下(↓たる)  
 ㉙ 細長き板ぎれに挿みしを(↓たる)  
 ㉚ a 身にあはせて借りし黒き禮服(↓たる)  
 ㉛ b 買ひ求めしゴタ板の魯廷の貴族譜(↓たる)  
 ㉜ c 小「カバン」に入れしのみ(↓たる)  
 ㉝ 思ひせまりて書きし如くなりき(↓たる)  
 ㉞ 書き記したる紀行(↓つる)  
 ㉟ かくは學び得たと問はぬことなかりき(↓つる)  
 ㊱ 丁寧にいらへしたる余が(↓つる)  
 ㊲ 人さへ欺きたるにて(↓つる)  
 ㊳ 手巾を濡らしたるを(↓つる)  
 ㊴ 余が借したる書を(↓つる)  
 ㊵ 同郷人にさへ知られければ(↓ぬれ)  
 ㊶ 身の事に關りしを包み隠したれど(↓ぬれ)  
 ㊷ 助の綱をわれに投げ掛けたるは(↓し)  
 ㊸ 舞臺にて卒倒しきとて(↓つ)  
 ㊹ 情交は深くなりきとて(↓ぬ)
- 以上の、過去・完了助動詞についての変更を一応終止形でまとめ

ると(き↓り) 六例、(き↓たり) 六例、(たり↓つ) 六例のほか  
 (けり↓ぬ)・(たり↓ぬ)・(たり↓き)・(き↓つ)・(き↓ぬ)が  
 各一例である。一見、無原則にみえるが鴎外は過去・完了の六種の  
 助動詞をそれぞれの意味用法に応じて使い分けたのではないだろう  
 か。特に「たり」に関する例が半数近くあり「たり」の用法には非  
 常に注意を払っている。これらの用例において、過去・完了の助動  
 詞がどのように使い分けられているか、それぞれの表現内容や場面  
 との関連から考えてみよう。

まず、①④②⑤④④⑤⑤⑤(き↓り)と②⑤②⑦⑤③ a b c ⑤⑤(き↓たり)は  
 過去から完了への変更であるが、「り」「たり」が単に動作・作用の  
 完了を示すだけでなく、動作・作用の行われる状態が存在あるいは  
 継続している意味を表わす。②⑦①①③④④④(たり↓つ)は、「たり」  
 に存在・継続という意味を認めた場合において完了の「つ」に変更  
 する必要があるであろう。③②(たり↓ぬ)と③③(たり↓き)の  
 場合も同じ理由と考えられる。②⑨(けり↓ぬ)は過去から完了への  
 変更でこの場面の表現内容と時制を合わせている。④④(き↓つ)と  
 ④⑦(き↓ぬ)も過去から完了への変更だが「つ」と「ぬ」と意味  
 の上でも使い分けているようだ。つまり「つ」は主観的な強い直写  
 表現に「ぬ」は客観的な弱い表現に用いられている。おそらく「つ」  
 の音が鋭く「ぬ」の音が軟かであるという語感の違いによる使い分  
 けでもあろう。

次に過去・完了の助動詞の省略および加筆の例を挙げる。

- ⑤ 名はいつも一級の首にしるされたるに(↓たりし)

⑨ 取調も次第に埒りければ(↓行け)  
 ②⑨ 癡癡なる歡樂のみ存じたるを(↓たりし)  
 ③⑦ 小をんなが持て来し一盞の咖啡(↓来る)  
 ④③ 果して往きつけばとて(↓往きつきぬとも)  
 ⑥④ 「レス」などを堆く積み上げたりければ(↓たれ)  
 ⑥⑤ 木綿ぎれを取上げしを見れば(↓取上ぐる)  
 その他、受身・自発・断定などの助動詞への変更は次のとおりで  
 ある。

④ 鏝りつけたれば↓彫りつけられたれば  
 ①⑦ 引籠みて立てる↓引籠みて立てられたる  
 ②② 項にのみ注ぎたり↓項にのみ注がれたる  
 ⑤② 貧血の性ありしゆゑ↓貧血の性なりしゆゑ  
 鴎外は、過去・完了の助動詞を非常に厳密に用いようとしたこと  
 が解る。物語が一人称の回想形式で叙述されている中において時点  
 の描写を精確に立体的にしようとしたのである。

『塵泥』における過去・完了の助動詞の変更は、それぞれの意味  
 用法を識別し使い分けたところに、従来の鴎外の語法意識とは違う  
 新たな規範の下での書き換えであることが想定できる。このような  
 鴎外の語法意識の変革は何に拠るものであろうか。『美奈和集』に  
 於て大規文彦著『言海』(明治24)の「語法指南」(注4)が改訂の指針で  
 あったように、『塵泥』に於ても何か拠るべき規範があるように思  
 われる。

鴎外の日記には、大正四年一月二四日「塵泥を一校し畢る」、

大正四年二月二日「塵泥を校し畢る」と、二カ所に『塵泥』校正に関する記述があるのみで、詳しい記録は残されていない。『塵泥』改訂の時期に比較的近いころ、山田孝雄著『奈良朝文法史』（大正2・5）『平安朝文法史』（大正2・6）『平家物語の語法』（大正3・12）などが刊行されており、これらの文献成立の前提となった同氏の『日本文法論』（明治41・9）に着目してみたい。鵜外は、山田孝雄に対し「山田博士を得て（中略）国語の将来について一つの安心を得た」と言っていたことを、小島政二郎『鵜外・荷風・万太郎』（昭和40・9文芸春秋新社）が回想しており、鵜外の山田孝雄への厚い信頼と、彼の文法説への共鳴が察せられる。そこで、『日本文法論』と鵜外の『塵泥』改訂時の語法とをつき比べてみると、一致する点が少なからずみうけられる。

例えば、「たり」に就いて、山田説では「たり」は「て」と「あり」との合成せるものなれば、その意義も自然にこの二者の合一せる如き姿あり。即一旦確定せる動作状態について、その結果がなほ存在せるを示すなり√とあり、「たり」を「存在√」の意味に規定する。また「つ」「ぬ」に就いては、△共に事實状態の陳述の確めに興りて力あり、二者はこの點に於いて一致すれど又その間に差あり。即「つ」は其實事状態を直寫的に説明するものにして、その事實状態が文主によりてあらはさるることの確めを主者自らの側より直寫的にあらはすなり。√△之に反して「ぬ」は傍觀的に其の状態動作を説明して其の動作状態の確めをあらはす√とあり両者の意味の違いを区別する。「けり」に就いては、△「けり」は「き」と等しく回想

をあらはすに用いられるが故に、往々「き」の代理をなすことあり。然れども、その間に差異は明に存す。即「けり」は啻に回想するのみならず必現實を基本として、これによりて回想を起すなり。この故にまゝ咏嘆の「けり」などと称せらるるものあり√と記し、「けり」を△詠嘆√とみて、回想の「き」と区別する。以上のような点で、鵜外は山田説を参照し、『塵泥』改訂の際に拠るべき規準としたのではないかと推測される。

また、鵜外は、与謝野晶子の『新澤源氏物語』序文（明45・1）を書いている中で、「わたくしは源氏物語を讀む度に、いつも或る抗拒に打ち勝った上でなくては、詞から意に達することが出来ないやうに感じます」「源氏物語の文章は、詞の新古は別としても、兎に角讀み易い文章ではないらう思はれます」と述べており、『源氏物語』の文章に精通していたことを窺わせる。鵜外にとってこの時期に『源氏物語』を読み返したことは中古語法を改めて認識し直すこととなり、その影響もあつて『塵泥』では『源氏物語』に擬えた文体を試みたのではないかと推定される。『塵泥』での改訂を考える上で、山田孝雄の文法説や『源氏物語』文体の影響は見逃せないであろう。

#### 助詞の変更

② 中よりしはがれたる↓中には咳枯れたる

- ⑤⑧ ビスマルク侯が進退如何↓ビスマルク侯の進退如何  
 ④① 訝りながら披きて讀めば↓訝りつゝも披きて讀めば  
 ④⑦ a 縦令彼に誠ありとて↓縦令彼に誠ありとも  
 ④⑦ b 縦令情交は深くなりきとて↓縦令情交は深くなりぬとも  
 ④⑧ 果して往きつげばとて↓果して往きつきぬとも  
 ⑤⑥ 我愛にて繋ぎ留めでは↓我愛もて繋ぎ留めでは  
 ⑥⑥ 様々の係累もあらん↓様々の係累もやあらん  
 ⑦⑦ 暗き空にすかして↓暗き空にすかせば  
 ④⑦ a b ④⑧は、列挙接続の「て」を逆接仮定条件を示す「とも」に換えて文意を強調。④⑧は動作の起点を示す格助詞「より」を場所を指示する「には」に変更。④①は、副助詞「AながらB」がAの状態のもとでBが実現する意味であり、接続助詞「AつつB」への変更はAとBとが相互に併行して実現する意味となる。⑤⑥も文意の強調。⑥⑥は係助詞「や」の補筆で、疑問の意を強調。⑦⑦は列挙接続の「て」を順接の「ば」に改め、前提条件を明確に示す。これらの変更は、文意の強調と、主旨を明確に示すためであろう。  
 次に、助詞を一字削除した例を挙げる。
- ⑧ 暇あることには↓暇あるごとに  
 ⑧① 十五の時に↓十五の時  
 ③⑦ 幾種ともなく↓幾種となく  
 ④⑨ 風は面を撲てり↓風面を撲てり  
 ⑤⑧ 本國に歸りての後↓本國に歸りて後  
 ⑥⑥ 東に歸へる心はなきか↓東にかへる心なきか

⑦⑦ 彼を憎むころは↓彼を憎むころ  
 ⑧ ③⑦④⑨⑥⑥⑦は係助詞の省略、③①⑤⑧は格助詞の省略である。山田孝雄の文法説によると△元來、國語にありては、主體は助詞の助なくてあらはさるるが本來の規則なり▽とあるので、古典本來の語法に拠つたと考えられる。

#### 送り仮名の変更

送り仮名の加えられた例は、五箇所ある。

- ② 珍げ↓珍しげ ⑩ a b 往て↓往きて ②⑤ 出し↓出でし ⑥⑥ 衝て↓衝いて

いづれも、活用語の語尾変化するところから送り仮名が振られている。

送り仮名の省略された例は、二箇所ある。

- ⑬ a b 且つ↓且 ⑬⑭ 唯ぞ↓唯 ②③ 始めて↓始て ②⑤ 再び↓再び  
 ③① 足らず勝ち↓足らず勝 ⑤⑤ 買ひ求め↓買求め ⑥① 玉ひし↓玉し  
 ⑥⑤ 産まれ↓産れ ⑥⑥ 居りし↓居し ⑥⑤ 上がらん↓上らん  
 ⑪⑬⑭②③⑤⑤③⑦③⑨ a b ⑤③又た↓又

『美奈和集』では内閣官報局編纂『送假名法』が、鵜外の改削の方向と合致していたが、『塵泥』の場合はその送り仮名法に必ずしも当て嵌らない点がみられる。例えば、⑬ a b 「且」は、『官報局』では△送假名ヲ附スヘキ接讀詞▽の中に上げられ「且つ」となっている。明治四十年三月の国語調査委員会編『送假名法』を参照してみると、△且。ノ如キ漢字ノ下ニ尙一字ノ假名ヲ送ランコトハ、餘リニ

過冗ナルヲ感アリ√として「且」には送り仮名を付けないことを定めている。その他の送り仮名の変更について各用例ごとに『官報局』と『調査会』との規準に照らし合わせてみると、「又」「唯」「再び」「買求め」「上らん」の例がどちらの規準にも適合し、「始て」「産れ」「足らず勝」の例は『官報局』の送り仮名法と一致する。変更前の「始めて」「産まれん」「足らず勝ち」の送り仮名を多く振った例が『調査会』の規準に当て嵌まるのである。<sup>⑥⑥</sup>「居し」は八るし√と読み方を変えたとも考えられ、<sup>⑥⑦</sup>「玉し」は誤植の可能性もある。送り仮名法は時代によって移り変わり、慣用に従って変則も生れる。その規範がまだ一定しない時期であり、鵜外自身の送り仮名意識にも揺れがあったことが認められる。

『塵泥』では（又た↓又）の変更が十一箇所あり、送り仮名の「た」を省略し「又」に統一しようとする方向が目立つ。送り仮名法を参照したと見られる『美奈和集』において（又た↓又）の変更は六箇所みられたが『塵泥』ではそれをさらに徹底させようとしている。しかし、<sup>②⑩ a</sup><sup>③③ a</sup><sup>④③</sup>の三箇所だけは「又た」と表記されて「た」が残っており、見落しかと思われる。『塵泥』では「又」「又た」「また」「亦」という四種の異なる表記が混在しており、鵜外の使い分けの意識は必ずしも明らかでない。表記の統一という面からみると、いささか不統一の感が残る。

（唯↓唯）の変更について、『塵泥』では「唯」という表記のほか「たゞ」「唯だ」「唯々」という五種の表記が混在する。<sup>④④</sup>「唯」のような『国民之友』以来ずっと送り仮名の付されていない

例もあるが、総体的に「唯だ」の送り仮名は送る傾向にあると言える。とすれば、<sup>⑬ b</sup><sup>⑭⑥</sup>の「唯」への変更は『送り仮名法』に拠るものではなく誤植とみた方がよいかも知れない。

#### 漢字から平仮名への変更

<sup>⑫</sup>尚ほ↓なほ <sup>⑬ a</sup>我心↓わが心 <sup>⑬ b</sup>我手足↓わが手足 <sup>⑭</sup>果なき↓はかなき <sup>⑮</sup>爰に↓ここに <sup>⑯</sup>頼みの↓とみの <sup>⑰</sup>一段の事↓一段のこと <sup>⑱</sup>寝ねつ↓いねつ <sup>⑲</sup>還へり↓かへり <sup>⑳</sup>歸へる↓かへる <sup>㉑</sup>不圖↓ふと <sup>㉒⑲⑳ a b</sup>又↓また

<sup>㉓</sup>「なお」の平仮名表記のほかに、『塵泥』では<sup>③④⑤⑥⑦</sup>「猶」<sup>⑪⑫⑬⑭</sup>「猶ほ」という漢字表記がみられ、「尚ほ」の一箇所だけ表記が異なるので平仮名に換えたのである。<sup>⑵⑶⑷⑸ a b</sup>「また」への変更は四箇所あるが「又」「又た」という漢字表記のものと混在している。副詞や接続詞の場合、漢字の送り仮名が曖昧で徹底していないため、仮名書きに直したとも考えられる。表記の統一という面からみると非常に不統一な改変である。<sup>⑬ a b</sup>「我」は、「われ」とも「わが」とも読めて前後の関係から読み方を判断せねばならず、送り仮名のない読み易い漢字を平仮名で表わしたのである。<sup>⑲⑳</sup>は、当て字を平仮名表記に変更している。

#### 平仮名から漢字への変更

<sup>㉔</sup>風俗など↓風俗杯 <sup>㉕</sup>中ごろ↓中頃 <sup>㉖</sup>われを↓我を <sup>㉗</sup>おもふやう↓思ふやう <sup>㉘</sup>この故よし↓此故よし <sup>㉙ a</sup>ものいふ↓物



言ふ ①⑥bこれら↓此等 ④ふみ↓文 ⑤なし難き↓爲し難き  
 ⑤あはせて↓合せて ⑤向はん正↓向はん事 ⑤この二十日はかり↓此二十日はかり ⑥その氣色↓其氣色 ⑥歩みうる↓歩み得る

代名詞⑬⑭b⑮「此」・⑯「其」の漢字への変更が目につく。だが、逆に漢字から平仮名に変更された⑳「爰↓ここ」という例もあり、理由のはっきりしない恣意的な変更のように思う。同様に㉑「こと↓事」は、逆の例㉒「事↓こと」もみられるのである。このような変更から、組版された段階での校正において、字数を調整するために削補されたという理由も考えられる。また文章上の漢字と仮名との配合に気を使っているようでもある。

### 漢字の用字変更

④a斯恨↓此恨 ④b鏝りつけ↓彫りつけ ⑬欲↓慾 ⑳協ふ↓愜ふ ㉑呆然↓茫然 ㉒析きて↓拆きて ㉓行く↓徃く ④捲け↓蒔け ④跟きて↓附きて ㉔淋し↓寂し ㉕坐↓座  
 漢字の読み方が同じで意味の類似した別の漢字への変更である。鵜外は漢字にこだわったようで、⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕は、漢字本来の意味に近い用字に改められている。④a④b④㉖は一般的な通用漢字に変更。㉖「拆」は「析」の別字体である。

仮名遣いに就ては既に『美奈和集』で改めるべき点が改められたためか『塵泥』では変更がみられなかった。

踊り字から本字体、本字体から踊り字への変更について若干指摘しておきたい。

⑥隔て↓隔てて ⑪紛々↓紛紛 ④なかく↓なかなか  
 ④屢々↓屢々 ⑤稍や↓稍々 ⑥唯ぞ↓唯々 ⑥唯だ↓唯々  
 ④⑤⑥踊り字の変更は、恐らく印刷所の活字の所蔵状況あるいは植字の際の選別の問題と思われる。⑥井クトリア↓井クトリア、の活字変更も同じ理由と考えられる。⑥⑪④は踊り字が二行目の行頭に来るため本字体に直したのであろう。⑥は『塵泥』で二行目行頭が踊り字「ど」にも拘らず放置されたままとなっている。

### 誤植の訂正および誤植

誤植の訂正は一箇所ある。

⑦堪へ難ければ↓堪へ難ければ  
 誤植は少なくとも十一箇所ある。

①晴れがましき↓晴れがしき ⑧簿冊↓薄冊 ⑨講筵に列る↓講筵に到る ⑩時來れば包みても包みがたきは↓時來れば包みがたきは ⑪縫ものなどする↓縫ものなどとする ⑫跣ふしたり↓跣ふしつり ⑬魯西亞より歸り來んまで↓魯西亞より來んまで ⑭思ひせまり↓思ひませり ⑮心がまへを。といひつ↓心がまへを。いひつ、 ⑯楊背に持たせ↓楊背を持たせ

『美奈和集』『改訂水沫集』での誤植がそのまま引き継がれて残っている例もみられる。

⑲我学問は荒みね ⑲万戸寂、然たり

また『塵泥』では段落分けがなく改行せずに文をつないでいる誤りが三箇所ある。

① 余一人のみなれば。——② 五年前の事なりしが

⑩ 悟りたりと思ひぬ。——⑪ 余は私に思ふやう

⑬ 深く信じたりき。——⑭ 嗚呼、彼も一時

これらは『塵泥』の原拠である『改訂水沫集』において、文が行末で終り、次の行頭に一字下げがないため改行と見做されず『塵泥』でそのまま文を続けてしまったものと思われる。文内容から、また諸本対比の上からも段落分けをする方が妥当であろう。

## おわりに

「舞姫」の『塵泥』収録に際する改訂を調査検討して来たところ、語法面および語彙面において極めて中古的な特徴が認められた。

先ず、語法面では、過去・完了の助動詞六種について鵜外の使い分け意識が中古語法に則して書き換えられたものであることが推定できた。『美奈和集』収録時には『言海』の「語法指南」が改訂上の規範とされたが、時代と共に鵜外の文法的規範意識も推移し、『塵泥』収録の頃には山田孝雄の『日本文法論』への共鳴があったものと思われる。しかも、この頃、鵜外は、源氏物語を改めて読み返しており、源氏物語の読解を通じて中古語法を再認識したにちがいない。そのような影響下に、『塵泥』では中古語法が多用されたのではないだろうか。

語彙面でも中古語への変更が目立った。鵜外の古語に対する愛着を強く示したものに「空車」(大正5・4)の一文がある。

古言は寶である。しかし什襲してこれを藏して置くのは、寶の持ちぐされである。縦ひ尊重して用ゐずに置くにしても、用ゐざれば死物である。わたくしは寶を掘り出して活かしてこれを用ゐる。わたくしは古言に新なる性命を與へる。

『塵泥』での改訂は正しくこの「空車」の理論の実践であったと言えるだろう。

さらに鵜外は漢字の使用についても厳格であったことが窺える。

「鸚鵡石」(明治42・5)の中で、校正刷の漢字に対して「由來を知っている字の方が心持が好いから直して遣った」「僕は分らない字は使ひたくないのだ」と述べていることから理解できよう。また、「訳文集」の校正の際に、「漢字は大体『康熙字典』に拠り、日本語は『言海』に拠るように」と指示を与えたことが小島政二郎の『鵜外・荷風・万太郎』の中で回想されており、『舞姫』校正に当り、これらの字書を参考にしたとも考えられる。

改訂内容を吟味してみると、何箇所かはより良く効果的にもなっていた。しかし全体を把握した場合、誤植の多いことも考え合わせ、必ずしも改善されたとは言い難い面もある。送り仮名など国語表記を当時の表記法に合せようとした結果、見落し部分が続出し、かえって全体に表記が不統一となっている。

要するに、『塵泥』収録の「舞姫」文は、鵜外が当時の文法規範や表記法にない改訂を試みた文体であって、中古和文に近づけよ

うとしたのが特徴である。

ところで、『塵泥』で改訂された部分の大半は、鷗外生存中の最終版である『縮刷水沫集』（大正5・8春陽堂）に受け継がれず、『塵泥』のみの改訂に終ってしまった。結局、鷗外は『塵泥』で『舞姫』の新しい文体を試みたものの納得の行く本文とはなり得ず、最終的には『美奈和集』系の愛着をもつ本文に多少の手直しを加え「舞姫」本文の決定稿としたと考えられる。

「舞姫」の三系統（初出系・美奈和集系・塵泥）の諸本文中、『塵泥』文は、鷗外の規範意識が最も強く現れた文章であり、中古和文のスタイルに擬えている。鷗外本来の文章感覚による文体ではないようである。このような特異な性格をもつ『塵泥』文が、鷗外特有の文体と呼べるだろうか。従って、「舞姫」の文体を研究する場合、『塵泥』文だけをもって対象とすべきではなく、諸本文に検討する必要があると思うのである。

#### 注

- 1 拙稿「森鷗外『舞姫』異本考―縮刷本『美奈和集』の位置づけのために―」（『樟蔭国文学』昭和55・12）および「『舞姫』諸本考再論」（同、昭和58・11）参照。
- 2 岩波版『鷗外全集』（昭和46年刊）でもこの部分は誤植と見做し『改訂水沫集』によって訂正している。
- 3 阿達義雄論では「完了態への傾斜が著しいことが知られる。之は第一次の大改訂に於て、文の終止に、現写的・主観的な

「つ」を多くしたのに応じ、文の内部に於ても完了的方向を採らざるを得なくなつたものと思われる。」と説いているが、用例を詳しく検討すると一概に「完了態への傾斜が著しい」とは言い難く、しかも『美奈和集』（第一次の大改訂）で文末を「つ」に改めた部分と『塵泥』で文中を完了態にかえた部分とは同じ分節中にはなく、分節の異なる箇所での改訂である場合が多いので、『塵泥』での文中の助動詞変更は『美奈和集』における改変とは別個のものであると思われる。

大槻文彦の「語法指南」は明治三十年に「訂正増減」され『廣日本文典』および『廣日本文典別記』として単行発刊されている。「文章篇」が加えられ、品詞論が部分的に修正された。

この頃の主な文法書に、落合直文著『日本大文典』（明治32）、同『大増訂ことはの泉』付録「語法摘要」（明治41）や金沢庄三郎著『日本文法新論』（明治45）、文部省「文法上許容ニ関スル事項」（明治38）などがあり、これらを参照したが『塵泥』の改訂に特に影響を及ぼした点は見られなかった。

鷗外の「故落合直文君に就て」（明治37・2「明星」第二号）には、「落合君と交際してから、物を書くのに、テニヲハや假名遣に氣を注げなければ成らぬと云ふことを知つたので有ります。それから落合君に聴きながら直しました。」と記されている。井上通泰氏談「森鷗外君の文章に就いて」（『鷗外森林太郎傳』附録、昭和9・7昭和書房）には、「森

君の本領はやはり文章にあつたらう。一日自分を訪問して文法を教はらうといふので、二時間ばかり講義したらもう分つたといひ、その後文章に誤謬が無くなつた。」とある。森銑三の『明治人物閑話』（昭57・9中央公論社）では、「鷗外が雅文で書いた『文づかひ』を落合直文に見て貰つて、文法の誤りの訂正を受けたということは、文壇の佳話とせられてゐる」などという回想もあり、鷗外は文法に対して常に関心をもっていたことが証明される。

(付記)

本稿は「森鷗外『舞姫』本文研究と校本」（昭和62年6月刊行）に収録予定のものであるが、本誌の木村三四吾先生御退職記念号のために、単行論文としての形を整え、名前を連ねさせて頂いた。